

仏教的人間観から観たボードレール —六大煩悩と四諦八正道を中心に—

浅岡 夢二

【抄録】

本論文では、心の平安を得て、幸福に生きるための仏教的な人間観に基づいて、フランスの詩人、批評家であるボードレールの人生を分析する。文学者としてのボードレールの評価は高いが、仏教的人間観に基づいて考えれば、ボードレールのような姿勢で生きれば、必然的に不幸になるのは理の当然である。その意味で、ボードレールを、一種の反面教師として見るのが可能だろう。

【キーワード】

ボードレール, 仏教, 六大煩悩, 四諦, 八正道

はじめに

本論文では、「^{ろくだいぼんのう}六大煩悩」及び「^{したいはっしょうどう}四諦八正道」という伝統的な仏教の諸概念に基づいて、フランスの詩人、批評家であるボードレール (Charles-Pierre Baudelaire, 1821-1867) の考え方、生き方、人間観、世界観を分析する。その際に、詩人、批評家としてのボードレールというよりも、一人の人間としてのボードレールを検討することになるだろう。

1. 六大煩悩

まず、「六大煩悩」に基づいて、ボードレールの人生を検討してみよう。六大煩悩とは、①^{とん}貪 (分相応に与えられたもの以上のものを欲すること、分不相応な欲望)、②^{じん}瞋 (理性的ではない、動物的な怒りの気持ち)、③^ち癡 (因果をわきまえない愚かな心)、④^{まん}慢 (慢心、傲慢)、⑤^ぎ疑 (真理に対して疑念を抱くこと、疑いの気持ち、猜疑心)、⑥^{あくけん}悪見 (間違っただけの思い込みを抱くこと) という、六つの悪しき心の状態を指す。

1.1 貪

六大煩悩の最初の一つは、「^{とん}貪」である。ボードレールの人生において、貪が初めてはつきりと見られるのは、彼が成人に達して、亡父の財産を引き継いだときであろう。この時、ボードレールは、欲しいものは何でも次々と購入し、自分の欲望のままに生きていった。その結果、両親は、このままではボードレールが破産してしまうだろうと懸念して、ボードレールを禁治産処分とし、アンセルを「保佐人」として、ボードレールを保護させる。この時点から、ボードレールが亡くなるまで、ずっと、ボードレールとアンセルの間には、

金銭の授受をめぐる、攻防戦が繰り返されるのである。

これ以降も、ボードレールは欲しいものを見つけると、我慢ができずに買ってしまふ。収入がそれほどないにもかかわらず、分を越えた浪費をくり返すのである。そして、返せる見込みのない借金を次々と繰り返し、やがて、借金をして借金を返すという、終わりのない借金地獄に陥ることになる。まさに「貪」による人生の不幸としか言いようがない。知人たちに借金を重ねる他、母親にも無心の連続である。ここで、母親への手紙から、無心に関わる部分を何箇所か引用してみよう。

1847年12月4日の手紙。

よしそれが母上にとって千の苦痛に値しようとも、またよし母上がこの最後の用立てが本当に役立つことをお信じにならない場合でさえ、問題の金額のみならずどうにか二十日間ばかり食べていけるだけの額を送って下さい。(1)

1851年8月30日の手紙。

その上、小冊子の全額支払いに加え、本屋から借金の名目で少しばかり受け取り、それを明後日返すと約束してあるのです。どうかおねがいです、僕を叱らないでください。(中略)もし二百フランという額が無理ならば、百五十で結構です、もし百五十が多すぎるなら百、結局いくらでもかまいません。(2)

1852年3月27日の手紙。

愛するお母さん、これほど決定的な状態において、あえてお母さんをお願いするのは、次のようなことです。期日を過ぎた家賃が二期分あり、またある界限を離れる時は清算せねばならぬ勘定全部、肉屋、酒、乾物屋、等々、で四百フラン。それに例のお医者さんの所へは、最初の一月を前払いするために百五十フラン持って乗り込む方が良いでしょう。最後に、僕は本を少し買いたい、こんな風に本に事欠いているのは耐えられないことだし、それに化粧品少々も。(3)

1853年3月26日の手紙。

僕は最も苦しい、最も辛いことから始めます。——僕は最後の薪二本を焚き、指を凍えさせて書いています。——僕は昨日払うべきある支払いのために訴えられかけています。——月末には別の支払いのために訴えられることでしょう。(中略)——またお母さんに決して一文も無心をしないという約束もあった。——もう今日それも不可能です。(4)

1853年12月26日の手紙。

もう一言。——僕に最大の金、つまりお母さんに出来るだけの額を送って下さい、但しお母さんが困らないかぎりにおいて、というのは、結局僕が苦しんでいるのは全く当然なことだからです。——もしお母さんにお金がなければ、アンセル氏からそれを受取る許可を下さい、よしんばお母さんが四月以後彼に送金していない場合でも。(5)

以上のように、無心の連続である。母親に出す手紙は、基本的に無心のための手紙であると言ってよいほどである。母親に対してだけではない。友人、知人、知り合いなどに、その可能性さえあれば借金を申し込んでいる。まことに、ボードレールの人生は、「貪」、「貪」、「貪」の人生であった。

借金し続ければどうなるか。当然借金地獄であろう。たとえば、1860年10月11日付けの母親あての手紙には次のように書かれている。

僕の借金は、あらゆる借金は一定の時間がたつと倍になるという必然性にしがたって、倍になりました。(中略)僕はアロンデル氏に一万フラン借りていた。数年来この借金は一万五千になっています。僕は払うためにまた借りる。(中略)加えて、このような苦悶の中で仕事をする事の困難さからくる、総額の増大ということがあり、一方、日々の出費は変りなく続くのです。(6)

また、1861年2月あるいは3月の手紙には次のような記述がある。

——四十歳にもなり、法廷後見人付きで、巨大な負債、それに加えて、何よりも悪いことに、意志の喪失、退廃。精神それ自体さえ変質していないかどうか、誰が知りましょう。僕はそのことについて何も知りません、もう知ることはできない、なぜとって、努力をする能力さえ失ってしまったから。(7)

さらに、1864年10月13日付けのアンセルへの手紙では、何をするにもまず金が必要、という悪循環に陥って身動きできなくなっている様が、次のように報告されている。

——私の書き上げた断章全体は、優に千フランの価値あるものです。しかし、ベルギーにいる間は、これを発表させないでしょう(『哀れなベルギー!』)。——したがって、金を得るためにはフランスに行かねばならず、出発するためにも、——そしてまた、ナムィユール、ブリュージュ、アントワープへの小旅行(絵と彫刻の問題で、せいぜい六日)をまた始めるためにも、——まず金が必要。——すなわちこれは一個の悪循環です。(8)

ボードレールは軽率な借金を繰り返した。彼の人生は、借金、浪費、借金、浪費の連続だったのである。

1847年12月4日付けの母親への手紙には次のようにある。

私のでたらめな生活はおよそ次のように説明されます。すなわち仕事の必要に宛てる筈だった金の軽率な浪費。時は逃げ去り、さしせまった必要は残ります。(9)

さらに、1851年8月30日付けの母親への手紙には、多少の借金を返済したものの、その後で、当てにならない収入を見込んで手元の金に手をつけてしまう様子が次のように描写されている。

それから避けがたい赤字を僕のもうけた金でもって払いました。すなわち、避けがたい債権者たちとの約束です(洋服屋五十フラン、家具類五十フラン、等々)。その上僕は昔の小さい借金いくつかを支払いました。(中略)ところが、一昨日、僕はすぐ始まる来月の分到手をつけ、「風刺画(カリカチュール)」に関する僕の仕事がすぐに印刷されるのは確かだと信じ込んで、僕は二百フランというものを勇敢かつ一挙に使いはたしてしまいました。(10)

1.2 瞋

「瞋^{じん}」とは、怒り、憎悪、不快、苛立ちといった、他者ないしは環境に対する陰性の感情である。この「瞋」もボードレールの生活に満ち満ちていた。以下に、その例を挙げてみよう。

ボードレールは、1844年7月のものと推察される手紙において、彼に課せられた「準禁治産」の扱いに関して——そもそも、自分の愚行が原因でそのようになったにも拘らず——、次のように激しい怒りを表明している。

僕はこれ全体を大変平静な頭で書いていますが、怒りと驚愕によって惹き起こされ、僕が数日おちいっている、病気の状態を考える時、いったいどうして、いかなる手段によって、事が起こってしまったことに耐え得るだろうかと自問せざるを得ません。(中略)——お母さんは僕の怒りと悲しみを全く一時的なものとして見ていると言いましたね。ただただ僕に良かれと思って子供があ痛と言う程度のことをしていただけだと見なしていますね。だがここで、お母さんが一度も知らなかったと思われる一事をよく理解して下さい。それは、僕にとって本当に不幸なことに、僕は他の人たちと同じようにできていないということです。(11)

1851年8月30日付けの母親宛ての手紙では、次のように書いている。

僕たちの共通の知り合いの中で僕が怒りの感情なしに、喜んでさえ会うことの出来るような人は二人だけいます、オリヴィエ氏とラングレ氏です。(12)

もちろん、ここには誇張があるだろう。しかし、ボードレールが多くの人たちに対して怒りの感情を抱いたことは事実である。

1852年3月27日付けの母親宛ての手紙では、ジャンヌ・デュヴァルとの関係に触れつつ、次のように述べている。

時々僕は、書くことが出来るように、自分のところから逃げ出し、あるいは図書館、あるいは読書クラブ、あるいは酒屋、あるいは今日のようにカフェに行きます。その結果僕は恒常的な怒りの状態に置かれています。(13)

また、1860年2月16日付けのプーレ=マラシ宛ての手紙には、怒り狂ったあげく、次のように書いている。

私は、綴字法も知らないあのならず者どもに、侮辱された、侮辱されたのだ。もし私が雑用に攻め立てられているのでなかったら、あの知ったかぶり野郎に、奴の事務室のまん中で平手打ちを食わせてやっだろう。(14)

さらに、二日後の1860年2月18日付け、アルマン・フレース宛ての手紙では、次のように激しい苛立ちを表明している。

ある種のことがらについて、こんなに激しい調子で語ることをおゆるし下さい。支離滅裂と月並みと投げやりとは、激しすぎるかも知れぬほどのいら立ちをいつも私にひき起こしてきたのです。(15)

1860年10月11日付けの母親宛ての手紙では、「倨傲」「憎悪」「復讐」「無礼」といった言葉を連ねて、強烈な「瞋」の思いを述べている。

万事言ってしまうなければなりません、僕には、僕を支えている倨傲の心があり、すべての人間に対する荒々しい憎悪があります。いつも僕は、人間たちの頭上に立つ者でありたい、復讐したい、何の罰もこうむらずに無礼を働きたい、その他さまざまの子どもっぽいねがいをいただいているのです。(16)

1861年12月25日付けの母親宛ての手紙には、次のような一節が見られる。

それから「両世界評論」を一度訪問して、大そうよりあしらいを受けました。(その後、お話したように、完全な仲違いとなり、僕が怒りに襲われた時書くのを得意とする、例のような手紙一通のせいで、一段と深刻化したわけですが。)⁽¹⁷⁾

また、1866年2月18日付けのアンセル宛ての手紙には、「不快」という言葉が何度も何度も繰り返し登場する。

シャトーブリアン、バルザック、スタンダール、メリメ、ド・ヴィニイ、フローベール、バンヴィル、ゴーチエ、ルコント・ド・リールを除いて、現代のあらゆる層どもは、私に不快をあたえます。仰せのアカデミー会員たちも、不快。仰せの自由主義者たちも、不快。美德も、不快。悪徳も、不快。流暢な文体も、不快。進歩も、不快。⁽¹⁸⁾

さらに、『哀れなベルギー』という小著の下書きである。ここには、怒り、苛立ち、悪口、罵詈雑言しか見られない。したがって、部分的に引用すること自体がそもそも不可能であると言ってよい。全体にわたって、否定的な感情に満ち満ちているのである。

1.3 癡

さて、次は「癡」である。癡とは、愚かなこと、愚かな言動を指す。ボードレール自身は、もちろん自分のことを愚かだとは思っていなかったのであるが、その言動を見る限り、愚かさに満ちていると言わざるを得ない。たとえば、1853年3月26日付けの母親宛ての手紙には、そうした愚行の数々が記されている。

まず、自ら生活を紛糾させた結果、仕事をする時間さえ見出せない、と語っている。

この手紙のために、やっと一時間しか割けないほどの窮状と面倒の中にあるのです。——もうずっと前から、僕が実に見事に生活を紛糾させてしまったことと云ったら、仕事のための時間を見出すことすら出来ぬほどなのです。⁽¹⁹⁾

また、そのすぐ先で、借金を払わないために訴えられかけていると言っている。しかも、母親への約束を破ることもしている。

——僕は昨日払うべきある支払いのために訴えられかけています。——月末には別の支払いのために訴えられることでしょう。(中略)——またお母さんに決して一文も無心をしないという約束もあった。——もう今日それも不可能です。⁽²⁰⁾

さらにもう少し先では、とんでもない愚行のために、相当額の借金を作ってしまったいきさつが語られている。

——僕はある家に暮らしていましたが、その家の女主人たるや、その狡さ、金切声、ごまかし等で僕をさんざん苦しめ、僕はあまり辛いので、僕の習慣通りひととも言わずに、飛び出してしまったのです。僕は彼女に一文の借りもなかった、が愚かにも僕はそこに住んでいないのに、賃貸契約をそのままにしておいた、——そこから、僕の住まなかった下宿の部屋代が僕の彼女に対する借金の額、という結果になってしまったのです。⁽²¹⁾

賃貸契約をそのままにして、下宿の部屋から逃げ出し、住んでいなかった期間の賃貸料を借金にしてしまったわけである。しかも、自分の持ち物をすべてそこに置いてきてしまったので、作家としての仕事をする事さえできない。

ところが、僕は近いうちにとりにやることができるつもりで、本の全部、完成したのも書きかけのものも原稿全部、書類や手紙でいっぱい紙挟み、——デッサン類、要するにすべて、僕のもつ最も貴重なものすべて、つまり、紙類を、彼女のところに置いてきてしまったのです。⁽²²⁾

その結果、未完成原稿を出版社に渡すことになり、大切な関係を壊してしまうのである。

この間、ある出版屋、金持ちで愛想の良いある出版屋が僕に惚れ込み、本を一冊僕に注文しました。——役に立つ原稿の一部はあそこにある、——僕はやり直すことを試み、本を買い直し、お母さんに手紙を書かないようかたくなに努めました。一月十日、契約書によって著書を引渡さないわけにいかず、僕は金を受けとり、印刷屋に原稿を渡したのですが、その原稿のおよそ形をなしていないことは、最初の数枚の組みが出てみると、校正や組み変えを必要とする箇所があまりに多いので、いっそ組版をバラして新たに組み直すほうがましだと気づいたほどでした。(中略) これはつまり、職工の組んだ部分は——僕の過ちによって——無駄に等しく、——僕は体面上損害を払うことを余儀なくされた、ということです。印刷山際春海校正刷りに手を入れたのが返ってこないで、怒り出しました。出版屋は僕が気違いだと思い、憤激しました。⁽²³⁾

だが、それだけではない。ボードレールはさらに約束を破るのである。

これが全部ではありません。——オペラ座、——オペラ座の支配人は僕に、誰か評判

の高い音楽家によって音楽をつけてもらうために、新しい種類の台本を依頼してきました。(中略)——だが、貧窮と無秩序とは何ともひどい放心と憂鬱を生じさせ、ために僕は会合の約束をすべてすっぽかしてしまったのです。(24)

いや、まだある。さらに愚行は続く。ボードレールはさらに重ねて約束を破る。

これが全部ではありません。——ブルヴァールのある小屋の副支配人が僕に劇(ドラマ)を一つ依頼しています。今月本読みがあるはずでした——のにそれは出来上がっていません。——僕のその紳士との関係に免じて、あるやとい喝采師の親方が僕に三百フラン貸してくれ、それは先月また別の災難を償うのにあててしまいました。脚本が出来上がってれば、こんなことは何でもなかったでしょう。僕は副支配人に借金を払わせてもよかったし、さもなければ芝居の先々上げるべき利益または切符の売上げからそれを差し引かせたところですが、芝居は出来上がっていないのです。(25)

このあとで、ボードレールは「僕は、どうなることでしょう。——何が僕の身にふりかかってくるでしょう。」と言っている。「僕がどうなるか」「何が僕の身にふりかかってくるか」は火を見るよりも明らかではないだろうか。

ところが、ボードレールの愚行はまだ続く。同じ手紙で、ジャンヌ・デュヴァールとの関係を次のように語るのである。

——だがこのような残骸(ジャンヌ・デュヴァールのこと—浅岡注)、かくも深い憂鬱を前にしては、僕は眼が涙で一杯になるのを、——すべてを言ってしまえば、自分の過ちを責める気持で心が一杯になるのを感じます。——僕は二度にわたり彼女の宝石類と家具類を食いつぶしてしまい、僕のために借金をさせたり、手形に署名させたりしました。彼女を殴りもしました、そして結局、僕のような男はいかに行動するものか彼女に示す代わりに、僕はいつも彼女に放蕩と放浪生活の模範を示してきました。彼女は苦しみ、無言でいます。——ここに悔恨の種となることがないといえるでしょうか? そして僕はこの点についても、他のあらゆる点についてと同じく、罪があるのではないのでしょうか?(26)

悪行の後に、自分を責めたり、悔恨を感じたり、後悔したり、罪悪感を持ったりしても無駄である。というよりも、それらの行為は無駄どころか、百害あって一利なしなのである。というのも、悪行のあとで、「自分を責めたり、罪悪感を持ったり」すると、必ず悪行を繰り返すことになるからである。悪行を繰り返さないためには、「後悔」ではなくて、「反省」をしなければならない。「責める」「悔恨を感じる」「後悔する」「罪悪感を持つ」というのは、負のエネルギーを帯びているために、自分を変える方向に行くことができない。

負のエネルギーは、自分を変えるための正のエネルギーにならないのである。将来的に自分を変えるためには、中立の立場で、冷静に「反省」する必要があるのである。そうすれば、「反省」によって正のエネルギーが生じ、それが自分の生き方を変える積極的な力となるだろう。

以上、たった一通の手紙の中に、数々の「癡」を見てきたが、このようなボードレールが、他の場面で賢明な行動を取るとは到底考えられない。事実、ボードレールは、一生のあいだ、こうした愚行を繰り返すのである。すなわち、愚行、浪費、借金、愚行、浪費、借金が、ボードレールにおける〈地獄の環〉(悪循環)となったのである。

1.4 慢

「慢^{まん}」とは、慢心、傲慢、倨傲、思い上がりなどを指す。人を見下したり、侮蔑したりするのも「慢」である。こうした態度や行為も、一生のあいだ、ボードレールにつきまとうた。

ボードレールは、自分を特別な人間だと考えていた。自分は詩人であり、芸術家であり、ダンディであり、その辺の有象無象とは違うのだ、と主張する。しかし、そうした主張の陰には強烈な劣等感が隠されていたのである。人はなぜ「慢」に陥るか？ それは、劣等感を持っているからである。劣等感を補償しようとして、自分は凄い人間だと思おうとするのである。

ボードレールが慢の状態に陥っている例は、枚挙にいとまがない。ここでは、『日記』から、ボードレールが傲慢になっている箇所を挙げてみよう。

私がすべての人に嫌悪と恐怖を感じさせた時、私は孤独を勝ち得ることができるだろう。(27)

私たちは、他者にしたことを、他者からされる。蒔いた種は刈り取らねばならないからである。すなわち、《因果の法則》、《縁起の理法》、《原因と結果の法則》である。したがって、ボードレールは、一生のあいだ、嫌悪と恐怖を感じ続けて生きねばならないだろう。

友達が多ければ多いほど手袋もたくさん必要だ——疥癬にかからないために。(28)

すべての友だちを疥癬かきと見なす。なんという傲慢な態度であろう。そもそも、自分自身が、淋病や梅毒にかかっていたのではなかったか。

悪趣味の中で特に魅力のあるのは、他人を不快にするという貴族的な快樂である。(29)

同じく、《縁起の理法》によって、ボードレールは、他人からたびたび不快にされて、憂鬱な人生を生きた、みずからを貴族と見なしながら。

ダンディの永遠の優越性。(30)

どんな職能にもある卑しいもの。

「ダンディ」はなにもしない。

民衆を愚弄するためでなしに民衆に語りかけている「ダンディ」をきみは想像できるか。(31)

ダンディズム。

優越せる人間とはなにか。

それは専門家ではない。

それは閑暇と、広い教養をもつ人間である。

裕福であり、かつ仕事を愛すること。(32)

どんな職能も卑しいと考える。しかも、ダンディは何もしない。ゆえに、ボードレールは、まともに仕事をせず、遊んで暮らす。「小人閑居して不善をなす」である。すなわち、ボードレールは、暇であったがゆえに、借金を重ね、ついにどうしようもなくなるのである。

また、民衆を愚弄すればどうなるか。民衆から復讐されるだろう。ゆえに、次のような言葉を書きつけることになる。

私は疲れ果てた男のようなもので、この醜い世界のなかに己れを失い、群衆にこずきまわされ、眼は背後の深い年月のなかに、失望と苦悩しか見ず、目前にはなんら新鮮なものもなく教訓もなく苦悩もない嵐を見るのみだ。(33)

傲慢な人間は、世界を美しいと見ることができない。心が美しくないからである。また、群衆を愚弄したがゆえに、群衆からこずきまわされ、疲れ果てて、失望と苦悩にむしばまれ、醜い世界のなかを蹠踉とさまようのみである。

そして、ボードレールは群衆を愚弄するだけでは満足しない。さらに、同業者の文士たちを見下し、卑しめるのである。

他の多くの文士たちは、大部分、極めて無智で卑しい勤勉家である。(34)

勤勉家を卑しめるということは、勤勉家になりたくない、と願うことといっしょである。

ボードレールの願いは叶えられ、彼は、一生のあいだ、勤勉とは無縁の人間として過ごす。

1.5 疑

ボードレールはまた、「疑」の人でもあった。おそらく、彼が「疑」の人となった原因は、まずは、母親の再婚にあっただろう。母親が陸軍少佐ジャック・オーピックと再婚したとき、ボードレールは、母親をオーピック少佐に奪われた、言い換えれば、母親から捨てられたと感じた。自分を捨てる母親を信じることができないのは当然であろう。ここで母親に対して「疑」の心を持つ。また、その義父オーピックは、軍人的世界観から、ボードレールを、「無関心」、「軟弱」、「臆病」、「怠惰」な子どもと決めつけて、完全に拒絶する。そのような父親——母親を奪った上に、自分を全面的に拒絶する父親——に対し、「疑」の心を持つのは当然であろう。そこから、次の言葉が生まれる。

幼児からすでに私の中にあつた孤独の感情。家庭のうちにあつても——とりわけ、友人のなかにいるとき——永久に孤独な運命の感情。(35)

まわりのすべてを疑うとき、我々は「永遠の孤独」の中に生きる他なくなるだろう。「疑」もまた、我々を不幸にする大きな原因となるのである。

1.6 悪見

悪見あくけんというのは、仏教的に見て、「間違つた考え方」、「正しくない見方」ということである。ボードレールの「悪見」としてまず挙げるべきは、「原罪の思想」であろう。

その性もともと善良な人間とは何ですか？ 何処でそんな人間が知られたことがありますか？ その性もともと善良な人間などは一箇の怪物でしょう、つまり一箇の神でしょう。——もう貴君には、私を憤激させる種類の観念がどういふものであるかが、お察しになれると思います。私の言わんとするのは、この世の初め以来地球の表面そのもの書きしるされた理法（原罪のこと—浅岡注）を憤激させる種類の観念です。（中略）原罪のことについても、また観念に合せて鑄られた外形のことについても、私はよくこう考えたものです、有害かついやらしい野獣どもは、恐らく、人間の悪しき考えの、物質的生命界への生命化、肉体化、開花に他ならない、と。——故に自然全体が多少とも原罪の性質を帯びているのです。(36)

ここで、ボードレールは、本来善良な人間など存在しえないと言っている。人間というのは、原罪を背負つた、本質的に悪なる存在である、と主張するのである。だが、これは、

「人間には仏性がある」という仏教的人間観から見たら、まったく逆の考えとなる。仏教的には、人間はもともと善なる存在であり、仏性を持っており、その仏性を修行によって磨けば、悟りを開いて、力強い、素晴らしい人間となることができる、と考えるのが筋である。人間を含め、自然全体が原罪の性質を帯びている、とすれば、人間が幸せになる道は閉ざされる。ゆえに、ボードレールが幸せになる道はなかった。

次に、指摘すべきボードレールの「悪見」は女性蔑視の思想であろう。女性に対する侮蔑的言辭は『日記』に夥しく散見する。

私はいつも女が教会に入ることが許されていることに驚いたものだ。女が神とどんな会話をなすのだろうか。

永遠のヴィーナス（浮気、ヒステリー、気紛れ）は、悪魔の魅惑的な形の一つである。

(37)

女性を、神と無縁の存在であると見なす。また、永遠のヴィーナスにさえ、悪魔的なものを見ないではいられないのがボードレールであった。

女はダンディの逆である。

だから、ひとをぞっとさせることになる。

女は腹がへると食べたがる、のどが渇くと飲みたがる。

さかりがつくと、されたがる。

たいしたものだ！

女は自然的である、つまり忌むしい。

また女はつねに卑俗である、つまりダンディの逆だ。(38)

ダンディは、女と違って、腹がへっても食べたくない振りをする。のどが渇いても、飲みたくない振りをする。さかりがついても、したいと思っていない振りをする。だが、実際には、食べるし、飲むし、するのである。ここには、きわめて陰湿な偽善がある。自分が本当はどのような人間であるかが、まったく自覚できていないのである。

女性を軽蔑したと同時に、自然を忌み嫌ったのも、ボードレールが不幸になった大きな原因である。我々人間は、肉体を持っている以上、「自然」から無縁ではいられない。肉体という「自然」を持っているからである。そうした「事実」を否定すれば、幸福になることはできないだろう。間違った見方に基づいて生きた場合、決して幸福になることはできない。

以上、ボードレールの生き方を、六大煩悩の「貪」「瞋」「癡」「慢」「疑」「悪見」に照らして見てきた。その結果、ボードレールの一生は、「苦」に満ち満ちたものであることが明らかになった。そこで、次に、仏教における「四諦八正道」に基づいて、ボードレールの

生き方を分析してみる。

2. 四諦八正道

2.1 苦

四諦^{したい}とは、人生に関する四つの真理、すなわち、「苦」、「集^{じゅう}」、「滅^{めつ}」、「道^{どう}」である。「苦」とは、人生で味わう苦しみのこと。自分が苦しんでいることを客観的に見ることが必要である。「集」とは、その原因を探ること。「滅」とは、その苦しみの原因を断って、幸福になろうと決意すること。あるいは、幸福になった自分の姿を心に思い描くこと。「道」とは、幸福になるために実践すべき八つの道、すなわち「八正道^{はっしやうどう}」のことである。

では、まず、ここで、セシェ、ベルトゥの『ボードレールの生涯』⁽³⁹⁾から、ボードレールが人生において味わった「苦」を抜き出してみよう。

嫌悪、反感、嫉妬、非難、憂愁、孤独感、捨てられたという感情、恐怖、失意、落胆、悲哀、老憊、背徳、犬儒主義、錯乱、浮浪、放恣、軽蔑、投げやり、憤怒、貧苦、不安、窮策、借金、金銭不如意、窮迫、意気阻喪、疲労、困憊、衰え、あきらめ、悲嘆、無気力、倦怠、苦慮、物憂さ、暴虐、激怒、侮蔑、怒り、葛藤、意志の衰弱、怨み、怨恨、欲望、情欲、皮肉、痛罵、傲慢、無礼、苦悶、憂悶、衰弱、意志の消散、神経の疲労、死の観念、恥じ、負債、悲惨、懊惱、貧苦、疲憊、神経痛、苛立ち、発作、激烈な頭痛、嘔吐、眩暈、不眠、記憶の喪失、奇行、憔悴、矯激、……。

まるで、世界の苦悩を一身に背負っているかの如くである。まことに、ボードレールの一生は、「苦」に満ち満ちたものであった。しかし、四諦においては、自らの「苦」を客観視することが必要であるにも拘らず、ボードレールは苦しみのただ中であって、苦しみにまみれており、自らの苦しみを客観視する余裕を持たなかった。

2.2 集

「集^{じゅう}」とは、「苦」の原因を探り出すことである。ただし、そのためには、《縁起の理法》、すなわち、《原因と結果の法則》に基づく必要がある。そして、《縁起の理法》を適用するには、《自己責任の法則》に基づかなければならない。つまり、すべての苦しみを創り出したのは自分自身であると考えることが必須となる。しかるに、ボードレールは、さまざまな苦しみを経験したにも拘らず、一貫して、その責任を自分以外の他人、環境に転嫁し続けた。ゆえに「反省」とはついに無縁であったのである。

たとえば、次のような記述がある。

一昨日のある不快事、ある相当に由々しい——思考することを妨げるほど由々しい——

一打撃が私にふりかかり、ために私は重要な仕事を中断するに至った程でした。(40)

あるいは、次のような記述もある。

この一月に、なんとも非道な出来事が起り、僕はそのせいで病気になった。——これについては誰にも何も言っていない。——また言いたくもありません。のどを焼かれる思いがするでしょうから。(41)

さらに、次のような記述もある。

当地で『哀れなベルギイ』を仕上げることはといえば、その力はありません。私は衰弱して、死んだようなものだ。それから二三の雑誌に送らなければならない散文詩を山と抱えてもいる。それなのに、もう一步も前に進めないのです。私は身から出たのでない禍いに苦しんでいるのだが、これは、私が駄々っ子だった時分、世界の果てに暮らした時分と同じ状態です。(42)

いずれの例においても、自分の苦しみの原因を外部に責任転嫁している。いわく、「ある不快事」「思考することを妨げるほど由々しい打撃」が自分にふりかかったために、仕事を中断せざるを得なかった。いわく、「なんとも非道な出来事」が起こって、自分はそのために病気になった。いわく、「身から出たのでない禍い」に苦しんでいる。

だが、悪しき出来事も、良き出来事も、すべて、自分自身が呼び込んでいるのである。ボードレールの不規則な生活、不節制、他者への攻撃、侮蔑的な態度、放埒、浪費、愚行などを思えば、本人はそう思っていないが、「ある不快事」も「由々しい打撃」も「非道な出来事」も、すべて「身から出た鏽」であることは間違いない。また、そのように考えないかぎり、苦しみの原因は把握できず、したがって、原因が把握できない以上、その原因を取り去って苦しみから逃れることは不可能なのである。だから、ボードレールは、一生のあいだ、苦しみに襲われ続けた。そのように、責任転嫁をしてばかりいたので、結果として、ボードレールの人生は「言いわけ」の連続となった。

ところが、たえずくりかえされる性質の事故、予見する術をわきまねばならないのに僕の予見しなかった事故のために、作品は二週間後でなければ、恐らく月末にならねば、印刷できず、稿料は払えないというのです。(43)

もしある誤解が僕のあらゆる計画に衝突したのでなかったら久しい前から幸福であったはずの僕(44)

ああ、あの忌まわしい思いつき！（準禁治産にして法定後見人をつけること—浅岡注）これは、金銭にこだわりすぎる精神の、母親らしい思いつきで、僕に恥辱を与え、たえず生れ代る借金に僕を追いやり、僕からおよそ愛想のよさというものをうばい、僕の芸術家、文学者としての教育をさまたげ、不完全にとどまるようにさせたのだ。不明は悪意よりも大きな災厄をなすものです。(45)

ボードレールは、自分に起こる不都合の原因が、すべて外部にあると考えていた。そのために、彼は、ついに苦しみをともなう人生の不都合から逃れることができなかった。

2.3 滅

「滅^{めつ}」とは、苦しみの原因を特定し、その苦しみから逃れた自分の姿を思い描き、幸福になろうと決意することである。ボードレールの場合、「集」の段階で失敗しているのに、「滅」には至らないのであるが、そもそも、ボードレールは「幸福」になろうと決意することができなかったのである。

静かな水の上でかすかに（左右に）揺れているあの美しい大きな船、のんびりとしたノスタルジックな様子のあれらの巨船は、声にならない言葉でわれわれに告げてはいはしないか、いつわれわれは幸福に向かって船出するのか、と。(46)

ノスタルジックな様子をした巨船は、ボードレールに対して、「いつあなたは幸福になろうと決意するのか？」と聞いているのである。だが、ボードレールはこう答えるはずである。「決して！」と。なぜなら、ボードレールは、次のように言っているからである。

無為が私の身をむしばみ、私を苛なみ、私を食い滅らすばかりです。私には全くのところ、どうやって私がこの無為の不吉な作用を制御するだけの力を持ち、更に精神の絶対的な明晰さ、また成功と幸福と静穏さに対する不断の希望を保っていられるのかわかりません。(47)

あるいは、次のようにも言っている。

僕は、幸福になることは不可能だから論外としても (48)

自ら幸福になろうと決意しない人間——決意できない人間——を幸福にすることは、何人にとっても、いや、仏にとっても、神にとっても、絶対に無理であろう。

2.4 道

四諦を、「苦」、「集」、「滅」の順番で見えてきた。四番目は「道」である。道とは、自らが苦しみのうちにあることを自覚し（苦）、その原因を探り（集）、苦しみの原因を滅して幸福になろうと決意した（滅）人間が、幸福に至るために実践すべき、理にかなった八つの正しい道、すなわち、八正道のことである。八正道は、「正見」、「正思」、「正語」、「正業」、「正命」、「正精進」、「正念」、「正定」という八つの道から構成されている。それでは、それぞれの道に関し、いくつかの項目に渡って検討していこう。

2.4.1 正見

まずは「正見」である。これは、人に優しくすれば自分にも優しさが返され、憎しみをぶつけば憎しみが返ってくるというように、当然の摂理であるところの「《因果の理法》に基づいてものごとを見たか」ということである。

《因果の理法》に基づいてものごとを見るのが、まず、正見の出発である。つまり、「善因善果」、「悪因悪果」を知った上で、善き原因をつくって、善い結果を得、悪しき原因をつくらないようにして、悪しき結果を避ける、という生き方である。

しかるに、2.2「集」のところで見たとように、ボードレールは《因果の理法》に基づいて生きず、したがって、《自己責任の法則》も引き受けなかった。その結果として、実に悲惨な人生を生きることになったのである。ボードレールは、善き種を多く蒔かなかつたために、善き収穫を多く得ることができず、悪しき種を多く蒔いたために、悪しき収穫を多く得たのである。

「ものごとを正しく見たか」という点からすると、たとえば、ボードレールの恋愛観はどのようなものであったか。

恋愛は拷問または外科手術に酷似しているということ、このことは既に私の覚え書に書いたと思う。(中略) たとい恋人同士が互いに深く思いあい、相互に求めあう気持でいっばいだとしても、二人のうち的一方が相手よりも比較的平静で、夢中になり方が少ないのが常である。この夢中になり方が比較的少ない男または女が、執刀者であり拷問者である。そして、他の一人が患者であり犠牲者である。破廉恥な悲劇の序曲であるあのため息、あの呻き、あの叫び、あの喘ぎがきこえるか。これらの声を口にしなかった者があるか。耐えきれずにこれらの声をしばり出さなかった者があるか。そして念入りな拷問者によって加えられる拷問にも、これ以上苦しいものはないだろう。(49)

恋愛については、『日記』の中に、似たような記述が数多く見られるが、これは代表的な例である。確かに、恋愛においては、「二人のうち的一方が相手よりも比較的平静で、夢中になり方が少ないのが常である」。しかし、だからといって、冷静な方を「執刀者」「拷問者」と見なし、夢中になった方を「患者」「犠牲者」と見なすのは、極端すぎる見方、すなわち、正見に反する「悪見」のうちの「辺見」である。

また、恋愛それ自体の見方はどうだろうか。

私は言う、恋愛の唯一至高の悦楽は、悪をなすという確信にある、と。——そして男も女も、悪の中にこそ一切の悦楽があることを生まれながら知っているのだ。(50)

恋愛が悪であるなら、人間は恋愛によって幸せになることはできない。しかし、常ではないにしても、人間は恋愛を通して幸せになることはできるのである。「悪の中にこそ一切の悦楽」があるのではない。善の中にも喜びは見出されるだろう。したがって、恋愛において、悪をなすことの中にのみ悦楽がある、という見方もまた極端すぎる見方、すなわち「辺見」である。

さらに、「慢」（本論文 1.4 参照）において引用した文章の中に、「醜い世界」という表現があった。ボードレールは原則的に世界を醜いものと見なしている。しかし、それは、世界をありのままに正しく見ているとは言えないだろう。世界は、醜い場合もあれば、美しい場合もあり、そのどちらでもない場合もあるからである。世界が醜いのであれば、世界内存在である我々人間は幸福になることができない。

あるいは、人に優しいまなざしを向け、「慈悲に満ちた心で人に接したか」という点では、ボードレールはどうだっただろうか。

民衆を愚弄するためでなしに民衆に語りかけている「ダンディ」をきみは想像できるか。(51)

このダンディ——つまり、ボードレールのことである——に、慈悲のひとつかけらでもあるだろうか？

次に、『哀れなベルギイ』から引用してみる。

ベルギイ人の、というよりはブリュッセル人の顔は、陰気で、ぶさいくで、よどんだ蒼白い色、またはぶどう色をしており、顎のつくりも奇妙だし、人を脅かす遅鈍さの感じがする。

ベルギイ人の歩きぶりは、重苦しく、気違いじみている。後を見ながら歩いては、たえずぶつかりあう。(52)

あらゆるベルギー人の頭蓋は、例外なく空である。(53)

なんと悪意に満ちた見方であろう。人々を見る目に優しさが微塵もみられない。

さらに、「正しく観察したか」という点で考えると、ボードレールは、人を観察する時に、正しく見ないことが多かった。たとえば、次のような一節がある。

有用な人間であるということは、私にはいつも、なにかひどく醜悪なものに思われた。
(54)

「有用な人間」は、ただ有用であるに過ぎない。「有用な人間」がどうして醜悪であろうか。これは、ついに「有用な人間」になれなかった——あるいは、なりたくなかった——ボードレールが、人を歪めて観察している例である。

2.4.2 正思

次に、「^{しょうし}正思」である。これは自分の心に去来するさまざまな思念を正しくコントロールできたか、ということである。仏教的に難しく言えば、「^{むさぼり}貪欲・^{いかり}瞋恚・^{おろかさ}愚痴などの煩悩障碍をはなれた正しい思惟意思の作用」(55)を行なったか、ということである。

ボードレールは、まともな収入がないのに、浪費を続け、そして借金と無心をし続けた。これが「むさぼり」でなくていったい何だろう。

お手紙読んですぐ、デュクルー（版画商）に手紙を書き、お母さんを悩ましてほしくない、払いは僕だけにかかわることだと、言ってやりました。それに、月末には僕からたよりがあるだろうとも。ところが今や月があらたまって、僕は文なしの状態。お母さんからは絶対に何ももらいたくなかった（二万三千フランという額[母からの借金]！ぼくはしょっちゅうそのことを考える）、その僕が今日は、入用の二百フランを送って下さいとお願いするのです。すっかり率直に打明けますが、そのうち五、六十フランは、宿に払うため（中略）、あるいは、身じまいになくはならない品々を買うために、転用することでしょう。(56)

また、「怒り」についてはどうだろうか。1858年の母親宛ての手紙に、次のような表現が見られる。

僕は仕事をしなければいけないのに、今や僕とアンセル、または僕と彼の息子の間の表立った喧嘩の場合にそなえて立会人をさがさねばなりません。（中略）僕はそれでも事を極端にまでおし進める決心です、これは十年に一度ずつしか僕の心に湧き上らない、

あの不吉な怒りなのです。(中略)僕は激怒のあまり目に涙をうかべ、不機嫌が吐き気を催すほど喉もとにこみあげてくるのを感じます。(57)

ボードレールは、あれほどの「不吉な怒り」は十年に一度しか心に湧き上らない、と言っているが、もちろんそれは逆の誇張であり、本当はもっと頻繁にそうした怒りを感じていたのである。『日記』、『書簡』、『哀れなベルギー』などを紐解いてみれば、怒り——そして、倦怠——こそはボードレールの日常的な感情であったことがよくわかる。怒りにはアドレナリンの放出が伴うので、その後に倦怠が来るのは当然である。

さらに「愚痴」に関してはどうだろうか。これも、実にしばしば、『日記』や『書簡』に登場するのである。特に、母親への手紙は、「無心」か「愚痴」のために書かれたと言ってよい。こうした「出口なし」の状況——それは、ボードレール自らが招きよせたものである——に対する愚癡は、母親あての手紙の至るところに見られる。

不断の気分の悪さに余儀なくされた不断の無為、加うるにこの無為に対する憎悪、そして普段の手もと不如意のせいで、この無為から脱出することが絶対に不可能である、そういう状態を思ってもみて下さい。(58)

また、「愚かさ」に基づく思念として「相手に対して悪い思いや害する思いを持たなかったか」という点について見てみよう。これも枚挙にいとまがないほどである。たとえば、ジョルジュ・サンドについて次のように言う。

ジョルジュ・サンドを見るがよい。彼女は何といても、とりわけ大馬鹿者だ。(中略)私はこの愚かな女のことを考えると嫌悪で身震いする。もしも彼女にでくわしたら、頭に聖水盤を投げつけずにはいられまい。(59)

あるいは、次の一節。

他の多くの文士たちは、大部分、極めて無智で卑しい勤勉家である。(60)

さらに、相手を肉体的に害そうと思ったこともある。

——エモン氏について。彼は僕の側から何一つ挑発的なことはしなかったのに、ひどく無作法に僕を侮辱しました。——僕は、肉体的に彼をこらしめてやりたいと思いました。(61)

アンセルは賤しむべき男であり、僕は彼の妻彼の子供たちの前で彼を張り飛ばしに行

きます。僕は四時に彼を張り飛ばしに行きます。(62)

私は、綴字法も知らないあのならず者どもに、侮辱された、侮辱されたのだ。もし私が雑用に攻め立てられているのでなかったら、あの知ったかぶり野郎に、奴の事務所のまん中で平手打ちを食わせてやったろう。(63)

ボードレールはよく、相手が自分を無作法に侮辱した、つまり自分は侮辱された、と言うが、これには理由がある。一つ目の理由は、ボードレール自身が無作法に振る舞い、相手に屈辱を与えたこと。相手は、その反作用として、当然、ボードレールに対し侮辱的に振る舞うであろう。二つ目の理由は、ボードレールの自己評価が極端に低かったこと。そのために、普通の人間なら気にしないような、相手の些細な言動に、極端に反応し、「侮辱された」と怒り狂うのである。いずれにしても、問題は、相手にあるのではなく、ボードレール自身にある。だが、ボードレールは《自己責任の法則》を自覚していなかったので、問題を解決するに至らない。相手からの侮辱は自分が招き寄せていることが理解できなかったのである。〈世界という鏡〉には、自分自身の姿が映っているのだが、ボードレールにはどうしてもそのことがわからない。

2.4.3 正語

正語しょうごに関して、第一に挙げるべきは、「不妄語」(嘘をつかない)であろう。約束をしてそれを破る、というのは「不妄語」ふもうごに反する行為である。だとすれば、ボードレールは、正語に反する行為をたびたび行なってきたことになる。なぜなら、1864年のアンセルへの手紙に、次のように書いているからである。

なぜとって、私がこの約束を破ることをさまたげるものは何もないし——私は今まであなたにたくさんの約束をしてはいつも破ってきたのですから。(64)

あるいは、1862年の母親への手紙では、ユゴーの小説『レ・ミゼラブル』に関して、それを「不潔で愚劣な小説である」と感じながらも、嘘をついて好意的な書評を書いたことが記されている。

『レ・ミゼラブル』、お受け取りになったのでしょうか。書評を二つ、僕のと、ドールヴィリのとをそえました。不潔で愚劣な小説です。僕は、この点について、嘘をつく才能のあるところを見せたわけです。(65)

次に、正語として、「悪口・両舌りょうぜつ(中傷)・綺語きご(むだ口)をせず、真実で他を愛し融和

させる有益な言語」⁽⁶⁶⁾をなしたか、という項目を挙げておこう。

ボードレールは、レジオン・ドヌール勲章の話を持ってきた友人に対して、「勇気をもって」次のように言ったと、1860年の母親への手紙に書いている。

「勲章の代りに、金を、金を、ただ金だけを、くれるべきなのだ。もし勲章が5百フランに値するものなら、5百フランくれるがよい。二十フランにしか値しないなら、二十フランくれるがよい」要するに、下衆どもに向かって下衆らしく答えたのです。不幸になればなるほど、僕の倨傲の心は強くなる。⁽⁶⁷⁾

あるいは、1864年のアンセル宛ての手紙では、「人を傷つけることに、特別な快樂をおぼえるようになった」と白状している。

その上、二三カ月前から、私は自分の性格の手綱をゆるめ、人を傷つけたり、無作法にふるまって見せたりすることに——この点にかけて、気の向きしだいではみごとな才能を発揮する私ですが——特別な快樂をおぼえるようになったと、白状しなければなりません。⁽⁶⁸⁾

ボードレールは、他人から言葉によって侮辱されたり、傷つけられたりしたと、ずいぶん感じたようだが、それは、他でもない、ボードレール自身が悪口を言ったり、他人を言葉によって侮辱したり、傷つけたりしたために、《作用・反作用の法則》に基づいて、それがボードレールに返ってきたに過ぎない。人生の最後において、ボードレールは失語症に陥るが、その時、唯一発音できたのが、「*cré nom!*」(畜生!)という、神を罵る言葉であったのは、ボードレールの一生を象徴しているかもしれない。

2.4.4 正業

正業^{しょうごう}は、大きく二つに分けられる。一つ目は、「正しく仕事をしたか」、二つ目は、「正しく行為をしたか」である。

まず、「正しく仕事をしたか」という点を検証してみよう。ボードレールは、詩人、批評家であったので、その「仕事」は、規則正しく、勤勉に、文章を書くことであろう。しかるに、一生を通じて、ボードレールはまともに仕事をするができなかった。このことに関する記述は、実に夥しいものがある。

長い仕事とは、ひとがあえて始めようとしなない仕事である。これは悪夢となる。⁽⁶⁹⁾

為すべきことを一日延ばしにしていると、いつまでもそれができなくなる危険を犯す

ことになる。すぐに改宗しないと、天罰を受ける危険がある。(70)

悲惨から、病气から、憂鬱から、すべてから癒えるために欠乏しているのは、ひとえにただ仕事の愛好のみである。(71)

日々、義務と深慮の命ずるところをなせ。
お前がもし毎日仕事をするなら、人生はもっと耐え易いものとなろう。
六日間、休みなく仕事をせよ。(72)

私はまだ計画が実現された喜びを知らない。(73)

次に、「正しく行為をしたか」という観点に含まれる、「殺生(殺し)・偷盗(ぬすみ)・邪淫(不倫行為)を離れ、(中略)性道徳を守るなどの善行を」(74)なしたか、という点を見よう。「邪淫をしない」「性道徳を守る」ということには、「夫婦間以外の性行為をしない、ということの他に、「風俗店に頻繁に通ったり、娼婦たちとみだらな行為をしたりしない」ということも含まれるだろう。

ボードレールは1861年5月6日の母親への手紙で、次のように書いている。

しかし要するに、父上は頑固なまでに不器用だったのです。(中略)結局僕は(父親の元を——浅岡注)逃げ出し、その時からまったく見すてられたかたちになった。快樂だけに、不断の刺激だけに、熱中した——旅行、美しい家具、絵、娼婦たち、等々。今その罰をむごく受けているのです。(75)

このように、ボードレールは娼婦たちとの快樂にふけた。その結果、淋病や梅毒をうつされたことは、すでに述べた通りである。

ところで、『日記』中の「カルネ」には次のように書かれている。

ガブリエル 新ブレダー七。
アンナ ピガル三六。
マルグリット マルゼルブ五〇。
ラケル カデー二〇。
ケラー ジョッセ・ダンタン一八。
アンリエット サン・ニコラ九。
ジュディット トレヴィエーズ一六。
ルイーズ・ド・グレアン クリシー五〇。
(中略)

ブランシュ 新ブレダ街一五。
ファニー ジューベール街一〇。
マチルド サン・トノレ街二八六。
マドレーヌ・コロシテ・ダンタン六。
アンリエット フォーブール・ポワッソニエール一の二。
——？ フェルム・デ・マチュラン街。
クレマンヌ・デュピュイ パッサージ・ソーニエ二二。(76)

河盛好蔵が述べているように(77)、これらの人名は下級娼婦たちの名前である。こうした名前が手帳に書き連ねられていることが何を意味するかは、おのずと明らかであろう。

2.4.5 正命

次は「正しい生活をしたか」という「^{しょうみょう}正命」である。この正命に関してもボードレールは問題が多かった。

ここでは、まず、「睡眠・食事・業務・運動・休息などについて規則正しい生活を営むことによって、健康は増進し、仕事の能率も上がり、経済生活や家庭生活が健全に遂行される」(78)という点を見てみよう。

ボードレールは、過度の飲酒はもとより、オピオム、ハシッシュ、ジキタリス、ベラドンナといった種々の麻酔薬や興奮剤を濫用していた。ボードレールが規則的な仕事の習慣を持てなかった原因として、これらの薬物の過度な使用も挙げられるだろう。

また、ボードレールの手紙は、不平、不満、非難、退屈、倦怠、徒労感、空虚感などが満ちあふれている。たとえば、1856年の母親への手紙には次の一節が見られる。

私の精神は、いつも、永遠の「それが何になる」という問いに向かい合っていました。
(79)

なぜか？ それは、ボードレールが自らの存在の目的、つまり、人生の目的をついに見つけられなかったからでもあろう。

なにものも目的なしに存在しない。
だから私の存在は目的をもつ。如何なる目的か。私は知らない。(80)

母親宛ての同じ手紙の中には、さらに、次のような一節もみられる。

私はいまだに仕事をしていても気が散る状態で、死ぬほど退屈しています。いまだに

あらゆるものが空虚に見える瞬間があります。(81)

また、1857年12月25日の母親への手紙には、次のように書かれている。

というのも、数カ月来私は万事を中断するあの恐るべき倦怠気分にも落ち込んで
いるからです。私の机には月初めから、私がそれに手をつける勇気の出ない校正刷が山
積しており、そしていつだって、大きな苦痛とともに、この無為の深淵から脱出せねば
ならない時はくるのです。(82)

次に、「足ることを知って生活したか」という点を見てみよう。ボードレールは若年の頃
には、分不相応の贅沢をし、そのせいで借金を重ねた。また、年を経るにしたがって、仕
事をしないことから貧苦に陥り、その中で、返す当てのない借金を、次から次へと重ねて
いった。そして、ついには、債鬼に遭うことを恐れずにパリの街を歩くことができないほ
どになった。これでは、とうてい足ることを知った人生とは言えないであろう。

2.4.6 正精進

正精進しょうしょうじんに関しては、二つの点に関して検証しておこう。

まず、「一体どれだけ悪から遠ざかり、善の種をまいたか」(83)という点。

ボードレールは、そもそも、恋愛の悦びは悪をなすことにあると考えていた。

私は言う、恋愛の唯一至高の悦楽は、悪をなすという確信にある、と。——そして男
も女も、悪の中にこそ一切の悦楽があることを生まれながら知っているのだ。(84)

ボードレールの人生において、恋愛は非常に大きな位置を占めていた。ということは、
彼の人生においては、恋愛という「悪」をなす時間が多かったということである。

あるいは、次のような一節はどうか。

私がすべての人に嫌悪と恐怖を感じさせた時、私は孤独を勝ち得ることができるだろ
う。(85)

かくのごとき生き方をする人間が、「善」の種をまこうとするだろうか。

また、ボードレールは、女性の魅力的な顔に関して、次のように述べる。

女の風姿について。

魅惑的な、かつ美を形づくる風姿は次のようなものである。

歓楽に飽き果てた風姿。
倦怠した風姿。
軽はずみな風姿。
不貞くされた風姿。
冷たい風姿。
自分の心の中を見つめている風姿。
尊大な風姿。
強情な風姿。
意地悪現代的な風姿。
病気のような風姿。
猫のような、子供らしさと無頓着さと狡猾さのまじった風姿。(86)

ここには、全面的な悪への傾斜が見られる。ボードレールの趣味には、善への志向がまったく見られないのである。

次に、正精進の二つ目の点に関して検証しておく。

「勇気をもって正しく努力」したか、「理想に向かって努力」したか⁽⁸⁷⁾という点である。ボードレールは、そもそも、存在の目的、人生の目的、人生の理想をついに見出さなかった。そのため、ボードレールの耳のそばで、常に、「ア・クワ・ボン！」＝「それが何になるか！」という不吉な弔鐘が鳴り続けていたのである。「むなしさ」「徒労感」「無意味感」が、ボードレールの人生の基調をなしており、そのために、努力を継続することができなかった。それらを示すボードレールの言葉を引用してみよう。

——四十歳にもなり、法廷後見人付きで、巨大な負債、それに加えて、何よりも悪いことに、意志の喪失、退廃。精神それ自体さえ変質していないかどうか、誰が知りましょう。僕はそのことについて何も知りません、もう知ることはできない、なぜといって、努力をする能力さえ失ってしまったから。(87)

もちろん、努力しなくなったのは四十歳になってからではない。若年の頃から、ボードレールは持続的な努力ができなかった。

その証拠は、日記の中にも、書簡の中にも、夥しく見つけることができる。

一人の男が怠惰、夢想、自墮落といった習慣に陥って、重要なことをいつも翌日にまわすといった風だった場合、⁽⁸⁸⁾

なすべき努力をせずに、絶えず仕事を先延ばしにする、というのがボードレールの常態

であった。そこで、「仕事をせよ」、「仕事をせよ」と何度も何度も自分に命ずる。

日々、義務と深慮の命ずるところをなせ。
お前がもし毎日仕事をするなら、人生はもっと耐え易いものとなるう。
六日間、休みなく仕事をせよ。(89)

朝六時から正午まで、食事前に仕事をする。手さぐりで、目当てなしに、狂人のように仕事をする。そして結果をみよう。(90)

仕事をしなくてはならない。仕事への愛好からでなくとも、少なくとも絶望からでも。よく反省してみれば、仕事をする事は、遊ぶことよりも退屈ではないのだから。(91)

しかし、このように絶えず自分に「仕事をせよ」を命じ続けていること自体が、その命令が実行されなかったという証拠である。しっかり仕事をしている自分に対して、「仕事をせよ」と命じることはないからである。

ボードレールは、持続的な正しい努力ができなかった。

2.4.7 正念

正念^{しょうねん}とは、正しい念いである。正しい念いとは、「正しい意識をもち、理想目的を常に忘れない」(92)ことである。しかるに、ボードレールはすでに触れたように、人生の目的と理想を見出し得なかった。したがって、「正しい意識をもち、理想目的を常に忘れない」ということがそもそも不可能だったのである。したがって、その都度、状況に流されながら、目的もなく、蹠踉として、薄暗い人生の道を歩んでいく他なかった。

ボードレールの場合、心は常に二つの方向に引き裂かれていた。

どんな人間にも、どんな時にも、二つの祈願が同時にあって、一つは神に向かい、一つはサタンに向かう。神への祈願、あるいは精神性は、向上への希求である。サタンへの祈願、あるいは動物性は、下降への悦びである。女への愛や、動物、犬や猫などと親しむのは後者に属する。(93)

心が神の方に向かないわけではないのだが、「どんな時も」神への方向と悪魔への方向に引き裂かれていたのである。念いの方向を、一つに絞りきることができなかった。

2.4.8 正定

八正道の最後の項目が正定^{しょうじょう}である。ここでは、「日常生活でも心を静め、精神を集中」したか、また、「明鏡止水といわれる曇りない心や無念無想といわれる心の状態」を得ていたか⁽⁹⁴⁾という点に関して検証してみよう。上の「正念」でも見たように、ボードレールの心は常に二つに分裂しており、その精神は統一されたことがない。荒れた湖面のように、常に激しく揺れ動いてやまなかった。しかも、それは、ごく幼い頃からそうだったのである。

極く幼い頃から、私は心のうちに相反する二つの感情を抱いていた、生の恐怖と生の恍惚と。

神経質な怠け者の証拠だ。⁽⁹⁵⁾

二つの相反する感情によって心が引き裂かれていれば、我々はとうてい心の安らぎを得ることができない。したがって、次のような状態になる。

無為が私の身をむしばみ、私を苛なみ、私を食い減らすばかりです。私には全くのところ、どうやって私がこの無為の不吉な作用を制御するだけの力を持ち、更に精神の絶対的な明晰さ、また成功と幸福と静穏さに対する不断の希望を保っていられるのかわかりません。⁽⁹⁶⁾

あるいは、次のような状態。

九か月の間に、母親に手紙を書くため、お礼を言うだけのためにさえ、ただの一日も見出せないなどということがどうして起きたのでしょうか。全く驚くようなお話です。毎日そのことを考え、毎日、すぐ書こう、と自分に言いかせる。そして毎日が、数かぎりない無益な奔走のうちに、または何がしかの金をかせぐため大急ぎで書く病的な記事のでっち上げのうちに、飛ぶように過ぎて行くのです。(中略) この手紙はひどく支離滅裂なものになるでしょう。それも今の僕の精神状態と、自由に出来る時間が少ししかないことからくる避けがたい結果です。⁽⁹⁷⁾

精神状態は支離滅裂で、安らぎを得ている状態からは程遠いだろう。もちろん、精神統一をする時間さえ見出しがたいのである。

以上、仏教的人間観からボードレールの生涯を重層的、複合的、多角的に検証してきた。その結果、ボードレールのように生きれば、必然的に不幸になるということが明らかになった。逆に言えば、ボードレールとは反対の生き方をすることによって、幸福に生きることができる、ということである。その意味で、ボードレールを、一種の反面教師として見ることが可能だろう。反面教師として、ここまで凄まじい力を発揮する存在も稀である。

【註】

- (1) 『ボードレール全集 II』、福永武彦編集、人文書院、1963年、p.299
- (2) 同書、p.311
- (3) 同書、p.319
- (4) 同書、p.323
- (5) 同書、p.330
- (6) 同書、p.397
- (7) 同書、p.402
- (8) 同書、p.446
- (9) 同書、p.300
- (10) 同書、p.310
- (11) 同書、p.290
- (12) 同書、p.311
- (13) 同書、p.315
- (14) 同書、p.387
- (15) 同書、p.392
- (16) 同書、p.398
- (17) 同書、p.431
- (18) 同書、p.458
- (19) 同書、p.322
- (20) 同書、p.323
- (21) 同書、p.323
- (22) 同書、p.323
- (23) 同書、pp.323-324
- (24) 同書、pp.324-325
- (25) 同書、p.325
- (26) 同書、p.326
- (27) 同書、p.231
- (28) 同書、p.231
- (29) 同書、p.232
- (30) 同書、p.246
- (31) 同書、p.248
- (32) 同書、p.252
- (33) 同書、p.237
- (34) 同書、p.259

- (35) 同書、p.245
- (36) 同書、p.344
- (37) 同書、p.256
- (38) 同書、p.243
- (39) セシエ、ベルトゥ 『ボードレールの生涯』、齋藤磯雄訳、立風書房、1972年。本書は歴史的仮名遣いで書かれているが、引用に際しては、現代仮名遣いに改めさせていただいた。
- (40) 『ボードレール全集 II』、p.342
- (41) 同書、p.437
- (42) 同書、p.456
- (43) 同書、pp.310-311
- (44) 同書、p.372
- (45) 同書、p.405
- (46) 同書、p.226
- (47) 同書、p.299
- (48) 同書、p.395
- (49) 同書、pp.222-223
- (50) 同書、p.223
- (51) 同書、p.248
- (52) 『ボードレール全集 III』、福永武彦編集、人文書院、1963年、p.438
- (53) 同書、p.439
- (54) 『ボードレール全集 III』、p.245
- (55) 水野弘元『仏教の基礎知識』、春秋社、1971年、p.203
- (56) 『ボードレール全集 III』、pp.405-406
- (57) 同書、pp.372-373
- (58) 同書、p.298
- (59) 同書、pp.250-251
- (60) 同書、p.259
- (61) 同書、p.329
- (62) 同書、p.371
- (63) 同書、p.387
- (64) 同書、p.450
- (65) 同書、p.440
- (66) 水野弘元『仏教要語の基礎知識』、春秋社、1972年、p.185
- (67) 『ボードレール全集 II』、p.399
- (68) 同書、p.448

- (69) 同書、p.238
- (70) 同書、p.238
- (71) 同書、p.238
- (72) 同書、p.239
- (73) 同書、p.240
- (74) 水野弘元、同前、p.185
- (75) 『ボードレール全集 II』、p.410
- (76) 同書、p.271
- (77) 河盛好蔵『パリの憂愁 ボードレールとその時代』、河出書房新社、1978年、p.368
- (78) 水野弘元、同前、pp.185-186
- (79) 『ボードレール全集 II』、p.350
- (80) 同書、p.243
- (81) 同書、p.351
- (82) 同書、p.361
- (83) 同書、p.120
- (84) 同書、p.223
- (85) 同書、p.231
- (86) 同書、p.229
- (87) 同書、p.402
- (88) 同書、p.226
- (89) 同書、p.240
- (90) 同書、p.240
- (91) 同書、p.247
- (92) 水野弘元、同前、p.186
- (93) 『ボードレール全集 II』、p.247
- (94) 水野弘元、同前、p.186
- (95) 『ボードレール全集 II』、p.263
- (96) 同書、p.299
- (97) 同書、p.314-315

An analysis of the life of Baudelaire based on the Buddhist view of the human

— From the viewpoint of six major passions, four truths and eightfold right path —

Yumeji ASAOKA

Abstract

In this paper, the author analyzes the life of Baudelaire who is a French poet and a critical writer based on the Buddhist view of the human which seeks the way to make a happy life and peace of mind. On one hand, Baudelaire is evaluated as an excellent literary person, but on the other hand, considering his life based on the Buddhist view of human, his way of life inevitably realizes unhappy life. In this meaning, we can regard his life as a kind of teaching material by negative example.

Keyword

Baudelaire / Buddhism / six major passions / four truths / eightfold right path